優秀賞

みどりの香り

加藤　博子　千葉県千葉市　六十歳

山に囲まれた農村で育った。苗字より屋号が通じる土地柄で、風呂は薪で焚き、おやつは畑から採った野菜だった。しかし周辺の山林が伐採されて住宅地になると、異なる生活圏が出現した。「サザエさん」のような女性が、買い物かごを抱えて野菜を買い、お父さんは会社で給料をもらう。「町」ではスイッチひとつで風呂が沸くと聞き、ひっくり返るほど驚いた記憶がある。

こどもの嗅覚は鋭敏でクラスメイトが「町」の子か「村」の子かを一瞬で嗅ぎ分けた。服装や言葉遣いは同じでも、どこか生活に直結した緑の香りをまとう子には仲間意識を覚えた。じいちゃん、ばあちゃんの野菜で育った体は、何か別の栄養を蓄えていたのだろう。あれから半世紀、今では形勢が逆転し、後継者のいない農家は老人が庭先を耕すだけになった。八十歳を超えた叔父が、時折野菜を分けてくれるが、採れたてのにんじんは濃い香りがする。まるで市場に出すように洗ってあるから「泥つきのままでいいのに。」と言うと「手塩にかけた娘を汚れたまま嫁に出せるかよ。」と歯のない顔で笑う。そうだ、私の知っている緑の香りはいつだって情に満ちている。

先日、息子が婚約者を連れて来た。かわいらしいお嬢さんと話をするうち「あれ？」と思った。久しぶりに緑の香りがしたのだ。聞けば実家は兵庫県の山間で、祖父母のいる家で育ったという。

『息子よ、でかした。』私は胸の内で小さくガッツポーズをした。